

研究主題 「知的障害特別支援学校高等部における

コミュニケーション能力を育てる指導の工夫

ー学習したことを他の場面へ般化する取組の開発ー」

東京都教職員研修センター研修部専門教育向上課

東京都立青鳥特別支援学校 主任教諭 宮原 希

第1 研究のねらい

東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画(平成22年・東京都教育委員会)には、知的障害特別支援学校高等部における職業教育の充実及び障害が中・重度の生徒の職業能力の開発が課題として示されている。また、「知的障害特別支援学校におけるキャリア教育の推進」(平成21年・東京都教育委員会)によると、卒業生の就職の決め手となった能力は「人間関係形成能力」という調査結果がある。都立知的障害特別支援学校においてはこれまでも学習環境、教材などの構造化や自閉症の教育課程における社会性の学習など、人間関係形成能力育成のための様々な取組がある。

その中で、生徒にはコミュニケーションの方法に関して学習したことを、実際の場面で発揮することが難しい実態がみられる。そのため、コミュニケーション能力を育てるには、授業などで学んだコミュニケーションの方法を他の場面へ般化させることが必要である。他の場面への般化を促すためには、他の学習活動においても、共通した視点からのコミュニケーションの指導を位置付けることが重要だと考えた。そこで本研究では、知的障害特別支援学校におけるコミュニケーション能力を育てる工夫として、コミュニケーションの学習单元及び学習したことを生徒が他の場面で般化できるようにするための教材を開発することをねらいとした(図1)。

第2 研究の内容と方法

1 研究仮説

国語の授業において、場面によって適切な行動を選び、相手に伝えるためのコミュニケーションの学習を行い、その後、般化を促進する教材を使って支援することで、生徒は習得したコミュニケーションの方法を他の場面において般化できるであろう。

2 基礎研究

文献や先行研究により、開発研究に向けて以下のように整理した。

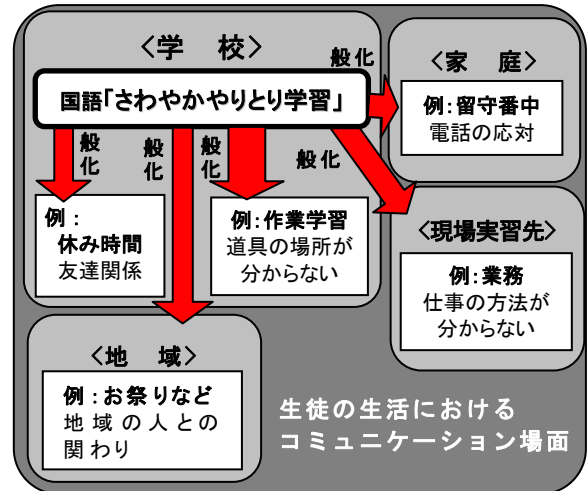
(1) 効果的に般化を促進するための手だて

- ・ 国語科以外の学習場面を利用する。(例：作業学習、日常生活の指導)
- ・ 般化を媒介するための視覚教材を導入する。(例：学習場面においても、般化が期待される場面においても、共通して活用できる視覚教材「さわやかチェックボード」)(図3)

(2) コミュニケーションの指導法

- ・ ソーシャル・スキル・トレーニングの手法を活用する。(例：ロールプレイング、フィードバック)

図1 本研究における般化のイメージ



- ・ アサーション・トレーニングの三つの伝え方を取り入れる。「アサーティブ」「攻撃的」「非主張的)」

3 調査研究

知的障害特別支援学校高等部の生徒のコミュニケーション能力の現状と課題を把握するため、以下のとおり、調査を行った(表1、図2)。

表1 調査研究の内容と結果

調査名	対象	内容	調査結果
「高等部生徒のコミュニケーション能力の現状と課題に関する調査」	都内特別支援学校3校 高等部教員 155名	・ 生徒のコミュニケーションに関する現状と課題について ・ コミュニケーション能力を伸ばす指導(一般化を含む)の現状について ・ 必要と感じる指導の要素や教材などについて	・ 教員は生徒のコミュニケーションの学習とその他の場面への一般化に向けての取組の重要性を感じている。 ・ 生徒の気持ちに寄り添った適切な働きかけや、日常的に活用できる視覚的教材があるとよいと感じている(図2)。
「生活適応支援チェックリスト(コミュニケーション)東京学芸大学菅野教授開発	都内特別支援学校 高等部生徒 120名	・ 個々の生徒のコミュニケーションに関する「話す」「聞く」「理解」などの項目ごとの実態について	・ 生徒の実態は様々であり、生徒ごとのコミュニケーション能力の実態の差が大きい。 ・ 生徒個人内における項目間の実態の差が大きい。

以上の調査結果より、コミュニケーション能力を身に付け他の場面へ一般化するためには、実態に合わせた視覚的教材などを活用した指導法の開発が重要であると考えた。

4 開発研究

(1) コミュニケーションの学習単元「さわやかやりとり学習」

場面によって適切な行動を選択し、相手に伝えるためのコミュニケーションの方法をロールプレイングなどによって学習する。伝え方から受ける印象として「さわやか(アサーティブ)」「いばり屋(攻撃的)」「おどおど(非主張的)」の三つの伝え方を学習する。

(2) 一般化を促進する教材

ア 「さわやかチェックボード」(図3)

生徒が、学習単元「さわやかやりとり学習」で学習した適切なコミュニケーション行動を、他の場面でも行うための支援をねらいとして開発した。学習単元内のロールプレイングで教員がコミュニケーションの方法を提示したり、生徒が操作して自他のコミュニケーション行動を評価したりする。他の場面では教員が個別に支援する場合等に提示し、学習した適切なコミュニケーション行動を想起するきっかけとすることで、具体的・継続的に指導する。その際、生徒が「よりよく伝えるにはどうしたらよいか」を考えるための支援として、よりよい伝え方を書き込める工夫をした。

イ 「さわやかふり返り表」

生徒が毎日の帰りの会などで記入し、自己評価をするプリント教材を開発した。生徒が、適切に伝えられた場面があったかを自分自身で振り返り、担任による評価を受け、よりよい伝え方をするための意識と意欲の向上につなげることをねらいとした。

図2 コミュニケーション能力を一般化するためにあるとよいと思う教材等

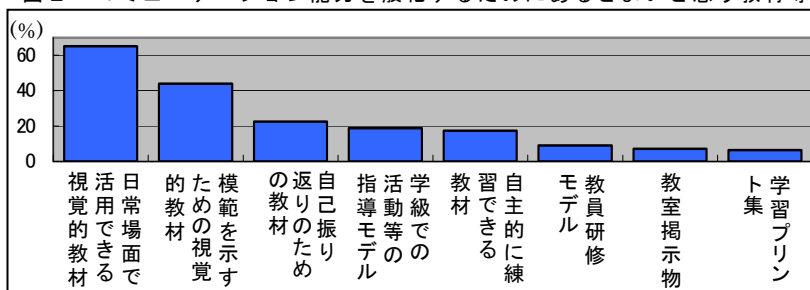
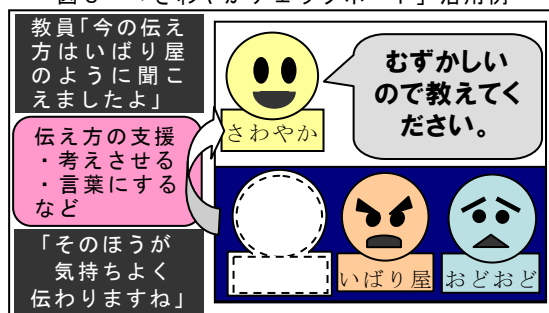


図3 「さわやかチェックボード」活用例



(3) 各教科等を横断したコミュニケーションの指導の全体計画モデル

「さわやかやりとり学習」「般化を促進する教材」を活用したコミュニケーションの指導の全体計画モデルを作成した。生徒ごとのコミュニケーションの指導目標に応じ、コミュニケーション行動の般化に着目した指導内容を、各教科等の年間指導計画の中に位置付けた。

5 検証授業

生徒のコミュニケーション行動の般化のために開発した学習単元と教材の有効性を検証した。

対象：都内特別支援学校高等部2年生(6名)

内容：国語「さわやかやりとり学習」の実施

作業学習、日常生活の指導におけるコミュニケーション行動の般化の検証

(1) 開発した学習単元、及び般化を促進する教材の有効性の検証

開発した学習単元と般化を促進する教材の有効性を検証し、成果と課題をまとめた(表2)。

表2 開発した学習単元及び教材の成果と課題

開発した学習単元及び教材					成果	課題及び解決のための手だて
単元：「さわやかやりとり学習-困ったとき、どうしよう-」					<ul style="list-style-type: none"> ・「さわやかチェックボード」による他者評価やビデオによる自己フィードバックが分かりやすく効果があった。 ・困った場面での行動を考え、選び、より適切なコミュニケーション行動の体験をロールプレイングで積み重ねることができた。 ・「さわやか」「いばり屋」「おどおど」がどういった伝え方であるのかを体験を基に理解し、適切なコミュニケーション行動のイメージができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・困難な状況において学習したことを般化しやすくするため、様々な設定の場面の体験が必要→全5時間の単元とし、より多くのロールプレイングを行う。
時	1	2	3	4		
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・さわやかに伝えるよさを知る ・教材の使い方 	<ul style="list-style-type: none"> ・困ったときにどうしたらいいか、考える ・ロールプレイング(導入) 	<ul style="list-style-type: none"> ・困ったときの行動を判断し、適切に伝える ・ロールプレイング(発展)、ビデオによる自己の振り返り 			
学習内容	<ul style="list-style-type: none"> ・三つの伝え方 ・さわやかチェックボード 	<ul style="list-style-type: none"> ・三つの伝え方 ・こんな困ったときどうしよう 	<ul style="list-style-type: none"> ・こんな困ったとき、どうしよう 	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな困ったとき 		
教材：さわやかチェックボード					<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が「さわやか」「いばり屋」「おどおど」の三つの伝え方を理解するための視覚的援助として有効であった。 ・他の場面での活用時、生徒が学習単元で学んだ内容を想起する効果があった。 ・生徒が、他の場面でも学習単元で学んだように「さわやかに伝えよう」と、意欲的に考えるきっかけとなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「いばり屋」や「おどおど」以外に、固執的であるなど伝え方の課題がある生徒への対応→実態に合わせ、教材の個別化をする。
教材：さわやか振り返り表					<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が自分のコミュニケーション行動を定期的に振り返ることで、声・姿勢・表情などに気を配って伝える意識を身に付けることができた。表への記入することをきっかけとし、「今日もさわやかに伝えたい」と意欲をもった生徒もいた。 ・担任教員が、生徒のコミュニケーション行動について支援し、やりとりをする機会が増えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・帰りの時間は他にも課題があるため、記入もれする日がある。→日課帳へ「さわやか振り返り表」を入れ込むなどの工夫をする。

(2) 他の場面における般化の検証

作業学習及び日常生活指導での生徒のコミュニケーション行動を表3に示した規準で評価することで、他の場面における般化の検証を行った。結果、

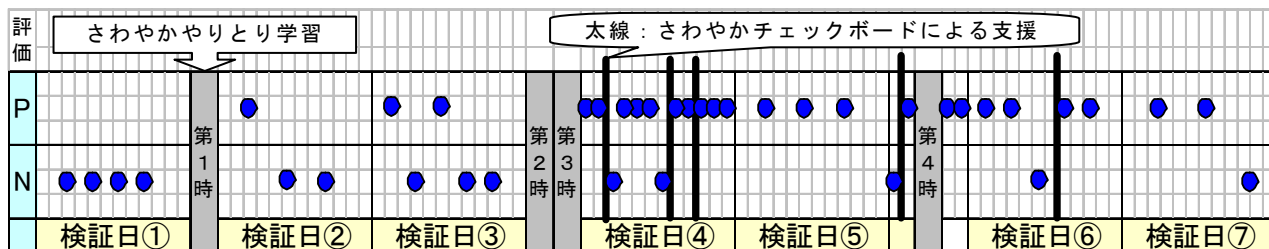
全対象生徒のP評価の出現率は徐々に高くなり、取組前の21.7%から取組後の最高76.9%へと向上した。各生徒の結果をみると、取組前はN評価のみであったが取組後はP評価が出現し取組が進むにつれ増加した生徒が6名中3名いた。ほとんどの生徒は「さわやかチェックボード」

表3 コミュニケーション行動の評価

評価	コミュニケーション行動の結果
P ポジティブ	<ul style="list-style-type: none"> ・さわやか ・伝えたいことが相手に伝わっている。 ・多くの受け手が不快に感じずに受け止められる伝え方である。
N ネガティブ	<ul style="list-style-type: none"> ・いばり屋 ・おどおど ・伝えたいことが相手に伝わっていない。 ・多くの受け手が不快に感じる可能性のある伝え方である。

の活用後にP評価が連続して出現した。例えば生徒Aは、小さな声で一方向的に伝えてしまう傾向があり、取組前はN評価が多かったが、取組後にはP評価が増えた。また、「さわやかチェックボード」による支援後はP評価が連続して出現し、P評価の出現率が大幅に向上した(図4)。対象学級の担任教員は、事後アンケートで「さわやかチェックボードを提示する支援によって、生徒たちが自らのコミュニケーション行動を自己評価していることが分かる」と述べている。

図4 生徒Aのコミュニケーション行動変容の経過



(3) 検証結果の分析・考察

検証結果より、学習単元「さわやかやりとり学習」での指導が進むにつれ、生徒のコミュニケーション行動は改善したこと、また、「さわやかチェックボード」の活用によって適切なコミュニケーション行動が繰り返し現れていることが読み取れた。生徒が学習単元で適切なコミュニケーション行動について学び、他の場面では「さわやかチェックボード」によって適切なコミュニケーション行動を想起し般化した結果であると分析できる。また、「さわやかふり返り表」を毎日作成することは、生徒の適切なコミュニケーションへの意識の向上につながった。

これらのことから、開発したコミュニケーションの学習単元を行い、般化を促進する教材によって支援することは、生徒が学習単元の中で練習したコミュニケーションの方法を他の場面で般化するために有効である。一方、生徒によって一律に同じ教材での支援を行うだけでは明確な改善につながらない場合には、個の課題に応じた教材や働きかけを工夫する必要があることが明らかになった。

第3 研究の成果

- 国語の授業において、場面によって適切な行動を選び相手に伝えるためのコミュニケーションの学習を行い、その後、般化を促進する教材を他の場面において具体的・継続的に使って支援することで、習得したコミュニケーションの方法を生徒自らが他の場面において般化するきっかけになった。
- 生徒はコミュニケーション行動を肯定的に評価されることで人との関わりに対して意欲的になり、自信を付けた。今後のコミュニケーション能力の更なる向上につながると考えられる。
- 般化を促進する学習場面では、多くの教員が「さわやかチェックボード」を提示して指導し、生徒の気づきを促すコミュニケーションが求められたことから、指導の改善につながった。

第4 今後の課題

- ・ 障害の程度や個に応じたコミュニケーション能力の指導と般化の支援の充実
- ・ 他学部及び他校種における研究成果の活用と検証
- ・ 家庭や地域等と連携した、学校外の場面における研究成果の活用と検証